

朝の通勤の道で、リードの紐をひいて犬を散歩させる人とすれ違う。暑い日も寒い日もあって、たいへんだなあと感じてしまう。

「ペットは家族の一員」という言葉を思い出した。災害のとき、飼い主はどのようにペットに寄り添えるのか、考えてみたくなった。

ペット防災セミナーに参加する

五月なかば、都内で開催された「ペット防災セミナー」に出席した。会場には、防災関係者や動物愛護団体、市民の人たち約一〇〇人が集まった。セミナーのテーマは、「災害時のペット同行避難支援」である。

講師は、熊本地震のときに被災地で活動した、一般社団法人HUGの代表理事・富士岡剛（ふじおか・たけし）氏だ。ちなみに、HUGの名称は、「抱きしめる」の英語のハグから取ったものだそうだ。

富士岡氏は、ペット防災の柱を、飼い主の備えと自治体、ボランティアのペット同行避難支援だと話し

するための支援のことを言います。ペットの支援ではないのです」

災害時のペット同行避難は、動物の問題ではなく、被災者の問題と位置づけられている。ルールは、環境省が作成した「人とペットの災害対策ガイドライン」に書かれている。これについては、後述したい。

なぜ、同行避難を支援しなくてはならないのだろうか。富士岡氏が言った。

「具体的には、放浪動物をつくらなためです。ペットの問題は、被災地全体のものとして捉える必要があります。放浪動物がうまれてしまうと、飼い主以外の人もこまることになりません」

講演のなかで、熊本地震被災地の益城町の「ワンニャンハウス」が画面に映った。総合体育館へ避難した犬一六頭、ネコ四匹が、敷地内の別の専用スペースへ移った。ハウスでは箱が二段に重ねられ、ケージが入れられている。

ここでも、富士岡氏は、「吠える犬は、共同の場にいることはむしろか

中臣さんの環境衛生ウォッチング

第69回

災害時のペット同行避難

た。

言葉の説明を加えておくと、同行避難は飼い主とペットとが避難所などへ行ったときに、飼い主は室内の生活スペースに、ペットは屋外の専用スペースにと避難するケースもある。一方、同伴避難は、例えば、避難所の室内スペースに飼い主とペットがともに生活することをさしてい

しいでしょうね」とつけくわえた。

「大切なのは日常の適正飼養です」最後に強調された言葉に、すべてが凝縮されていると思った。

ガイドラインを見る

私の手元に環境省作成の「人とペットの災害対策ガイドライン」がある。本文と資料との合計で一七六ページの分量だ。

見出しで、いちばんに目にとまる箇所があった。「災害時の対応は飼い主による『自助』が基本」とある。本文を抜粋する。

「災害時に行われる行政機関による支援（公助）では、人の救護が基本であることから、災害の発生当初には、ペットフードや水などの支援ですら困難なことが多い。飼い主はこうした場合にあっても、ペットの安全と健康を守り、他者に迷惑をかけることなく、災害を乗り越えてペットを適正に飼養管理していく責務を負っている」

つづけて述べられている。



中臣昌広 ●なかとみ・まさひろ

一般財団法人日本環境衛生センター
(技術調査役・環境衛生分野担当)

る。

ただし、室内に入る条件として、行政への犬の登録済み、狂犬病予防注射済みを基本として、場合によっては、狂犬病以外のワクチン接種済み、きれいな身だしなみ、吠え癖がないなどが求められるかもしれない。

富士岡氏は、飼い主の備えにペット防災の本質があると指摘する。「飼い主が、ふだんから適正飼育（適正飼養）をすることで。避難者のなかには、日頃からペットで迷惑を受けた人もきます。犬が鳴いたら、そこに（不満の）声がかいやすいのです。日常的に、飼い主、ペットが地域社会の一員となることです。あいさつの『おはようございます』が大切になります」

適正な飼育の先には、しつけがされているペットやマナーがある飼い主の存在がある。

次に、同行避難支援を説明している。富士岡氏は、こうふれている。「同行避難支援とは、被災者支援です。飼い主が適正にペットを飼育

「したがって普段から、災害時に必要となる備えをし、地域社会に受け入れられるように、ペットを適正に飼養管理する必要があります」これは、前述した富士岡氏の話していたことに重なるものだ。

ガイドラインでは、避難所等での衛生上の問題にもふれている。「避難所や応急仮設住宅では、様々な人が集まり共同生活をするため、動物との暮らしが苦手な方やアレルギーの方もいることを認識しなければならぬ。これまでの災害では、ペットがいることが、つらい避難生活の中の心の安らぎや支えになったという声がある一方で、咬傷事故や鳴き声への苦情、被毛や糞尿処理など、衛生面でトラブルになることもあった」

避難にあたって、ペットの飼養環境の様々な形が図になっている。避難所での形態は、室内の一部でペットと同居、避難所の軒先避難でペットと同居がある。避難所の敷地を利用して「ペット飼育スペース」をつくる場合、飼い主同士が協力し

てみんなで見守り管理するとある。自治体によっては、避難所への同行避難にあたって必要なケージを、日常から用意するように呼びかけている。

避難の形態では、自宅や仲間の家など安全な場所での飼育をする。動物病院、ペットショップに預ける。知人・親戚、動物保護シエルトに預けるなどがあがる。

ガイドラインの後半では、災害時のペット支援活動に不可欠なものとして「人材」「物資」「資金」の三つの要素があるとされている。

人材では、平常時から動物愛護推進員、地方獣医師会、民間団体等との連携、災害時のペット支援ボランティアの育成・登録などが例示されている。

物資の面では、主な備蓄場所として動物愛護センターや保健所など、災害時にペット対策活動の拠点施設となる場所がよいとしている。

資金の面では、ペットの飼養管理、物品の購入、動物救護施設の運営などにかかる資金が必要となるため、

つづけて担当者が言った。

「室内は空調がきいていて、快適な環境が維持されています。衛生面では、換気が一日二回実施され、散歩後に飼い主が犬の足をウェットティッシュ類で拭いています」

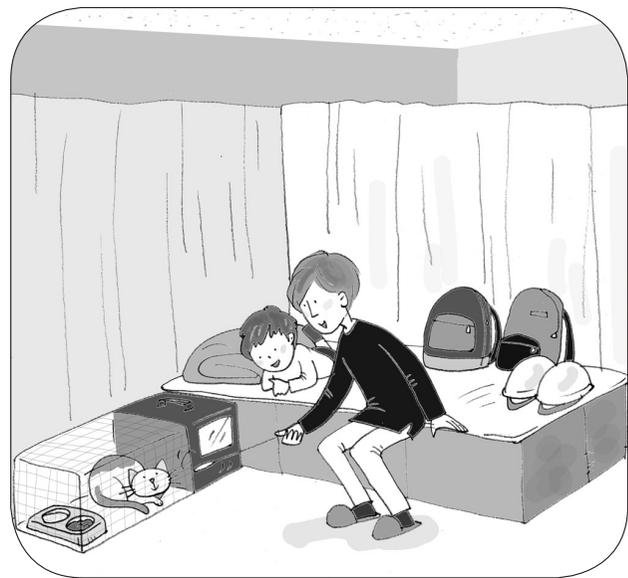
いままで室内でのペット同伴が可能なのは、施設に受け入れる場所の余裕があるケースだ。比較的に小規模な避難所では、状況が異なる。

熊本市の避難所となった公民館の管理者は、こう話した。

「ペットは、鳴き声、臭いの問題があつて、ほかの生活者のかたからの声もあり、屋外に置いてもらっています」

通常、多く見られるのは、避難所の敷地内の屋外にペット用の滞在場所をつくるものだ。東日本大震災被災地の仙台市の避難所のひとつは、屋外にテントを張って、そのなかにケージを置いてペットの滞在スペースをつくっていた。

この点について、世田谷区のパンフレット「災害時にペットを守るために」を参考にご紹介する。パンフ



平常時から義援金募集の受付窓口や振込口座の開設の検討に言及している。

被災地での ペット同行避難

二〇一六（平成二八）年五月なかば、熊本地震から一カ月後の熊本市を訪れた。地元の保健所とともに避難所の衛生対策活動で行ったのが、熊本市総合体育館だった。

レットの配置図では、ペット滞在スペースが校庭の片隅に設けられる。

説明には、こうある。

「ペットの滞在スペース（飼育場所）は、鳴き声等が届かないよう極力、避難者の避難生活を送る場所から離れた場所にします」

発災直後には、体育館や教室など校舎内が避難者で過密状態になる可能性が高いので、当初、ペットの滞在スペースを屋外の離れた場所にするのはやむを得ないだろう。

最後に大切なことを 確認する

約一〇年前、私が所属した保健所で、犬猫ペット事務の係長を担当した。

ときには、区民（市民）から電話が入って、「朝早くから、となりの犬の鳴き声が出て困っている。注意してほしい」「となりで、犬を多く飼っていて、うるさくてどうしようもない」など相談を受けた。

現場へ行って、飼い主から実態を聞き、犬の鳴き声については、しつ

玄関を入ったロビーの一部に、ペット同伴の居住スペースが設けられていた。壁面の飾られた壁にそって、高さ一五〇センチの段ボールの囲いが一六世帯分、並ぶ。

一部の段ボール囲いの上に、透明なビニールが全面を覆っていた。動物の鳴き声や臭いが迷惑にならないための気づかいなのだろうか。それとも、プライバシーの確保のためなのだろうか。

二〇一八（平成三〇）年七月の西日本豪雨被災地の倉敷市では、約二週間後にペット同伴世帯を中心にした避難所が小学校に開設された。当初には、八世帯で犬が九匹、その後に入退所があつて一〇世帯と犬猫のペットが同伴避難をした。

当時、その光景を担当者から聞いた。

「世帯ごとに段ボールベッド、間仕切りのカーテンが設置されています。段ボールベッドのそばに、ペット用ケージが置かれています。時間帯によって、ペットをケージから出している場合もあります」

けなど動物病院の獣医師からアドバイスを受けたり、行政で開催する「犬のしつけ教室」へ参加したりすることを助言した。

多頭飼いについては、飼い主自身の体調のわるさや高齢に伴う体力の衰えなど、手に負えない状態になっているケースがある。動物愛護団体へ相談して、場合によっては、飼養ボランティアの援助を受けることが必要になるだろう。

相談を受けてきたケースのいずれも、問題を抱えていて、災害になつたとき避難所への同行避難はむずかしいと言わざるをえない。

あらためて、前述した一般社団法人HUGの富士岡氏の言葉が脳裏をよぎった。

「大切なのは日常の適正飼養です」災害のときは、日常が顕在化するとされている。地域社会で日常にうまくいっていないことが、より鮮明になって浮き上がってくるのだ。

日頃から、きもちよく生活できる、人とペットとの共存社会の構築が何より重要だと思つた。



中臣さんの環境衛生ウォッチング